

祖母のコミュニケーション必勝法

中学2年 行木 ゆり

時々、祖母のコミュニケーション能力の異常な高さに困惑してしまう事がある。数年前と一緒にプールに行った時など、隣にいた親子に会釈をした、と思った次の瞬間には、「うちにも孫がいるのよ～。女の子が三人いてね…。」と話し始めていた。しかも、相手の方は嫌な顔一つされていなかったのだ。作り笑いかもしれない、とも思ったのだが、どうやら違うようだった。それから1時間ほど2人でお喋りして、その方も自分の家族の事を話してくださったらしい。あまりに盛り上がっていたので、結局途中で私達が止めた。

「ああ、はい、じゃあごめんくださーい。」

と、もう一度会釈をした後、その場を去る。

祖母ほど初対面の方と通じ合える人はそういないと思うが、「会釈から会話を始める」というのは良い方法かもしれない。

会釈。軽く挨拶や礼をする事。現在ではそちらの意味の方が広く知られているだろう。

ところが、実は仏教用語なのだ。

お経の中には、撞着して見える内容が説かれている場合がある。そのような異なる意見を照合し、その根本にある真義を明らかにして内容を端的に説明する、というのが「和会通釈」である。省略すると「会釈」「会通」となる。そこから転じて、相手の心を押し量って対応する事を「会釈」というようになった。さらに転じて「軽い挨拶」の意味になったとされる。

つまり、現在では「軽い挨拶」という意味合いが強いものの、その中には「思いやる」「相手と調和する」との意味も含まれるのだ。

会釈は、時にコミュニケーションのスタートになる。あくまで軽い挨拶。だが、その奥に「相手と通じ合いたい」という思いがあるから、私の祖母は意思疎通できるのではないだろうか。

丁寧過ぎず、しかし不躰でないちょうど良い塩梅の挨拶、それが会釈なのだ。

新型コロナウイルスが流行し、大きな声で元気良く挨拶する事が困難な現在、会釈は非常に理に適った挨拶であると思われる。マスクをつけていると、「目だけで相手に気持ちを伝える」というのはなかなか難しい。だが、会釈だと相手を気遣う心もそれとなく伝えやすいだろう。また、遠方に住む祖父母ともしばらく会えないような状況下だからこそ、身近にいてくださる方を思いやり、尊ぶ気持ちが大切なのだ。

「会釈」という挨拶の中にある、何気ない心遣い。会釈から始まるコミュニケーションでそれが伝わった瞬間、相手も少し笑顔になれるかもしれない。

祖母から学んだ「コミュニケーション必勝法」を今から実践していったら、どれほど周囲に笑顔が増えるだろうか。